

第一部 第三話 愛の神

むかしむかし、愛染明王という神様が  
おられたそうなの。この神様の前には、  
きれいな水が流れていて、この水は  
とってもおいしくて、まだ水道がないから、  
西の人も東の人も飲んでいたそうなの。

(※ 北潟は西地区、東地区に分かれています)

そんなある日、いつ生えたのか、  
大きなふじの木があったのだった。  
そうして、春になるときれいな花が咲いたんだと。  
この花は、いいにおいがしたんだと。

ところが、ある日のことじゃった。  
すごい嵐がふいてなあ、村の人を、  
おびやかしておったんじゃ。

「すごい嵐じゃのう。」

愛染明王様の近くに住んでいた、おじいさんとおばあさんは、おびえ、  
家の中でじっとして



たのじやった。

「この嵐じゃくとうぶんやまんのう。」

「ほんにのう。」

と、二人は弱りきった声でそう言うた。

「外には、とうぶん出れんでのう。」

「そうじゃのう。」

やれやれ、村の人たちも、外へは一步も出んかった。外では、

『ザアーザアー』と、雨が降り続いておった。

そんな時、急に『ゴロゴロビシヤー』、大きなカミナリが落ちてきよったんや。

「わあー」

「こりやだいぶ近くに落つたんじゃーないかのう。」

おじいさんとおばあさんは、ふるえながら外に出てみたんだと。すると、愛染明王様のいる方から



こえ  
声がしてきたんじやと。

「ばあさま、ばあさま、愛染明王様の方で何か声がしておらんか。」

「そういえばそうじやのう。」

「よし、行ってみよう。」

じいさまとばあさまは、走って愛染明王様の所に行ってみた。

「こ、こ、こ、これは、ど、どうしたことじや。」

なんと、あの愛染明王様が、落ちてきたカミナリをつかまえて、そのカミナリをおこっっておったんじや。

耳をすませて聞いてみると、こんな話し声がしてきおった。

「こら、カミナリ、わたしの大切なふじの木の上に落ちてこようとは、何事じや。おまえは、そんな

ことも分からののか。」

「すみません。つい足がすべってしまったて。」

カミナリは、いっしょうけんめい言い訳をしておったんじや。そんな会話が続いた後、愛染明王は、

「もうこの北<sup>きた</sup>潟<sup>がた</sup>の村<sup>むら</sup>には落ち<sup>お</sup>てくるんじゃないぞ。」

と、カミナリに言<sup>い</sup>聞<sup>き</sup>かせて、許<sup>ゆる</sup>してやったそうや。

それからというもの、この北<sup>きた</sup>潟<sup>がた</sup>の村<sup>むら</sup>には、二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>とカミナリは落ち<sup>お</sup>てこなかったそうや。